

ミステリ読書案内

2023. 6. 2 発行元

第483号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

長岡弘樹 「新・教場」

3月に小学館から長岡弘樹の新作『新・教場』が出た。長岡作品の柱となるシリーズで、内容のレベルも高い。ちょうどテレビドラマでも『風間公親・教場0』が開始となり、話題の本ということになる。

ベストセラー・シリーズ

帯には「シリーズ累計110万部突破」と書いてある。本書でシリーズ6巻目になる。雑誌『STORY BOX』に連載されたものを単行本にまとめ、プロローグとエピローグをつけた形。

6つの短編から出来ている。が、ストーリーには時間的な流れがあり、内容的にもつながっている部分が多い。「第九十四期初任科短期課程」の半年間の出来事と考えればよい。「警察」という職場はこれほどまでに体力的にも精神的にも大変なのかと思知らされる内容。

風間公親という人間像

いろんな視点から描かれているのだが、基本的には助教の尾風から見た風間の姿のパターンが多い。尾風は風間の指示で動き回り、あれこれと考えるのだが、結局は風間が

「何を考えているかわからない」まま過ぎていき、神経を擦り減らすことに…。最後まで行って風間の一言で今まで見えなかったものが一気に判明する構成になっている。

この風間の人間像がシリーズの一番の読みどころである。長岡の他の作品でも鋭い切れ味が魅力なのだが、本シリーズはいかにも冷酷そうに見え、非情に徹しているように見せ掛けることが結末の意外性に貢献していると言えるだろう。

「警察官としての適性」

風間「それでも気づかなかつたら助教をやめてもらおうか。」尾風へのセリフ。皮肉と圧力に満ちた言葉。警察学校だから通じるものなのかもしれない。私が長年勤めていた中学校で、生徒たちや後輩教員に対してこういう言い方はもうできない。パワハラ認定されてもしかたのない現在の情勢だから。

長岡弘樹「教場」シリーズ

1. 教場
2. 教場2
3. 教場0 刑事指導官・風間公親
4. 風間教場
5. 教場X 刑事指導官・風間公親
6. 新・教場

本書の流れは警察官として不適合な人物を見分けて、適性のない者は退校していく方向に持っていくの話なのだから、風間の対応も理解できるというもの。「命がけ」で行動することが求められる警察官の特殊性も関わってくる。

職務上のストレスの大きさ

第一話『鋼のモデリング』は、警察官の自殺について扱っている。仕事そのものが激務である上に、常に危険に対処しなければならず、緊張感がゆるむことがない。そのストレスの大きさに耐えきれなくなる警察官が中にいるということ。

暴力に立ち向かうことが求められ、民間人を守り、なおかつ自分自身のからだも守らなければならない。銃を持つことの意味も理解して行動しなければならない。風間教官の伝えたいもの…ということ。

海堂尊 「コロナ漂流録」

5月に宝島社から出た本。『コロナ黙示録』『コ

ロナ狂騒録』に続く第三弾。『チーム・バチスタの栄光』シリーズの流れの中の一冊になるが、ほとんどミステリの範囲からは逸脱している。前にも書いたように、作者の海堂尊自身が、コロナ禍をはじめとする世の中の動きに対してどうしても表現し、主張したいという思いが一杯に詰まった本だと思う。本書は今年の6月から今年の1月までの経過である。昨年夏以降もコロナ禍は第七波、第八波と続き、秋から冬にかけて次第に減少に転じた時期である。オミクロン株でなんとか治まりそうな気配が見え始めた頃のこと。

冒頭は、東城大学医学部の病院・黎明棟でコロナ病棟とホスピス棟の責任者に祭りあげられた田口医師が高階学長に呼び出され、部屋の取り換えを提案されるとともに、やっかいな若手医師の洲崎を部下にするよう押し付けられるところから始まる。洲崎はコロナ病棟の診察は拒否し、ホスピス棟だけ担当し、挙句に医学的根拠のない「効果性表示食品」を患者に勧めたりして物議を醸し出す。そんな中で桜宮市で選挙演説をしていた元総理大臣が手製の銃で撃たれ、大学病院に搬送されてくる。ここから元総理のやってきたコロナ対応や経済政策の話に進み、やがて「国葬儀」の場面になっていく。厚労省のはぐれ技官・白鳥圭輔、房総救急救命センターの彦根医師、時風新報社会部の別宮記者などが入り乱れて活躍し、東京五輪の贈収賄事件、宗教と政治の関係の問題、次なる万博関連の話、国産ワクチン開発と製薬会社…などと広範囲の事象に働きかけていく。これらの全ての元にあるのは…。現実の社会の中でも不透明なまま、隠されたまま時間が過ぎていつている問題である。「ずる賢い連中は、自分たちは決して戦場に出て行かない。」それもその通りだと思う。